

文芸学における言の時間性

——「直観」、「継起」を始点として——

緒言

日本における文芸学の代表的著作の一つとして岡崎義恵『文藝学概論』⁽¹⁾がある（「日本文芸の学」と「日本の文芸学」との間で揺らぎを示す岡崎義恵にとつてはある一時期の学説かもしれない）。この著作の冒頭部には文芸学の方法の要諦として「直観」の語が頻出する。文芸の解釈を理論と実証を結ぶ「直観」に依拠するのは方法論として茫漠としているが、後述するように時代性を考慮すればそれ以前よりは深化している。その歴史的意義を認めつつ本稿は「直観」の限界を見極め、文芸をより緻密に分析・統合するために「継起」、「言の時間性」を取り上げる。文芸学（特に文芸の概念と文芸史）における言と時間性、文芸の生成の具体的機構について論述したい。

「直観」を岡崎の文芸学の方法論的起点とするのは日本文芸学の提唱期、岡崎義恵「文芸学と文芸鑑賞」⁽²⁾において「科学的」意味で「文芸学において、かなり美的直観に隣接する位の哲学的直観を用ゐて、対象の本質を洞察する事も行はれてよいと思ふのである。」と述べているのによる。なお、岡崎義恵の師、大塚保治『美学概論』⁽³⁾の第一章の美学史にはI・カントの紹介はあるが、第三章「美的直観」にはI・カントの名は記されていない。大塚は「美的直観」という時の「直観」を哲学と混濁されないよう *Anschauen* ではなく *Schauen* の語を適切としている。併せて昭和10年の岡崎義恵『日本文藝学』⁽⁴⁾以前にI・カント 大西克禮訳『判断力批判』が昭和7年に刊行されていることを付言する。

渡 辺 仁 史

岡崎義恵は「直観」を定義して次のように述べる。

直観（又は直覚）は、日本では特に勘といふやうな語で云ひあらはされることもあり、また感の語でも示される場合があるが、これは理論や実証を経た後、それが感覚や感情と結合して習性的な情態を呈し、もはや理論・実証の手順を歴ずして体験される真理の把握を意味することもあり、また理論や実証によって確認される真理の予感・予測を意味することもある。（『文藝学概論』4ページ以下、ページ数はすべて数字のみ記す。）

それに関連する岡崎の「直観」についての言及もいくつか引用しておく。精神科学や文化科学の方面になると、直観の働く領域が遙かに多くなる。（同5）文芸学は後に述べるやうに、この精神文化の一つのあらはれである美的創造の世界を対象とするものであるから、文芸学の基礎学として美学がなければならぬが、その美学は主として論理と直観とによって美の真相を明かにするものである。（同5）

美的価値はそれ自身非常に直観的なものであるから、それを把握するためには、やはり研究者の直観を用ゐて、対象に浸透してゆく必要があるからである。（同二）

と述べるように岡崎にとつて「直観」は文芸学の基本となる方法である。

岡崎の師、芳賀矢一『日本文献学』⁽⁵⁾において言及されるA・ベーク *Encyklopädie und Methodologie der philologischen Wissenschaften* ⁽⁶⁾を参照する限り、芳賀と異なりベークは「直観 *Anschauung*」を重視している。一面でそれを受け継ぐ垣内松三の形象理論における「直観」について一部の人々の間で誤解があるとの垣内自身の言及もある。⁽⁷⁾なお、A・ベークの学説については国松孝二「文献学 A・ベーク」⁽⁸⁾が部

分訳とともに概要を提示している。

それらを踏まえつつ岡崎の無時間的「直観」を「美的静観性」(『文藝学概論』155)、「調和」(『文藝学概論』160)を介して同じく「直観」を重視するI・カントの「継起」という観点から再考したい。I・カント 篠田英雄訳『判断力批判』『純粹理性批判』(ともに岩波文庫)は nach einander, sukzessiv, Folge をそれぞれ「経時的」、「継続的」、「継起」と訳し分けている。(篠田は『純粹理性批判』「あとがき」でカントにおける「一義異語」の多用を指摘している。)(「U」はレクラム文庫版I・カント *Kritik der Urteilskraft* 『判断力批判』「V」はレクラム文庫版I・カント *Kritik der reinen Vernunft* 『純粹理性批判』の「U」である。数字はそのページ数である。)

- (1) nach einander への対応 U169 V94 V95 V98
 - (2) Gleichsein への対応 U157
 - (3) Nacheinander への対応 U113
 - (4) Beharrlichkeit への Folge, Gleichsein と同じく時間の三様態 V255
- (なお Sukzession (V105) は「経時的に相ついで起きる」と訳される。)

Zeitfolge は「時間継起」と訳される。(2) からすれば Gleichsein 「同時的存在」と関連する。(3) からすれば Nacheinander 「継起的存在」と並立される。(4) からすれば Gleichsein と並立するのび Zeitfolge は Folge と時間の問題に限定すれば同一と見なす。傍証として (3) Beharrlichen (4) Beharrlichkeit (常住不変性) あるいは持続性) が並立している。よって Folge 「継起」は nach einander 「経時的」とほぼ同義として解釈すべきである。

カントは

Sie hat nur Eine Dimension : verschiedene Zeiten sind nicht zugleich, sondern nach einander (so wie verschiedene Räume nicht nach einander, sondern zugleich sind).

時間は、一次元のみをもつ、従って多くの異なる時間は、同時的ではなく経時的 (nach einander) である。(それは多くの異なる空間が、経時的ではなくて同

時的であるのと同様である。)(V95 篠田英雄訳『純粹理性批判』(上) 97—98) とするが、

suchen wir auch diesen Mangel durch Analogien zu ersetzen, und stellen die Zeitfolge durch eine ins Unendliche fortgehende Linie vor, in welcher das Mannigfaltige eine Reihe ausmacht, die nur von einer Dimension ist, und schließen aus den Eigenschaften

dieser Linie auf alle Eigenschaften der Zeit, außer dem einigen, daß die Teile der ersten zugleich, die der letztern aber jederzeit nach einander sind.

我々は、この不足を類推によって補おうとして、時間の継続 (Zeitfolge) を無限に進行する直線によって表象する。そして多様なものはこの直線において、一次元をもつところの系列を形成する。そこで我々は、直線の種々な性質から時間の一切の性質を推及するのである。尤もその場合に、直線の諸部分は同時的 (zugleich) に存在するが、しかし時間の諸部分は常に経時的 (nach einander) であるという点だけが異なっている。(V97—98 篠田訳『純粹理性批判』(上) 100—101 傍線筆者)

とも述べ、時間は線とは異なり同時的に存在することはないという認識を示している。(ただし)これは「量 Quantum」の問題を想定している (U157)。カントは言語についてはほぼ沈黙しているので不明な点が多いが、F・ド・ソシュールが『一般言語学講義』「言語記号の性質 第二原理：能記の線的特質」で提示する「線」とは近接するように見受けられる。

ソシュールの述べる「能記の線的特質」では「能記は、聴取的性質のものであるから、時間のなかにも展開し、その諸特質を時間に仰いでいる：e) それは拡がりを表わす、そして b) この拡がりはただ一つの次元において測定可能である：すなわち線である。」⁽¹⁰⁾ という場合にもカントの「時間継起」は直接参照されてはおらず、ただ線状性の意味として使用されているが「言語事象を研究してまずおどろくことは、話手にとっては、時間におけるそれらの継起 succession は存在しないということである：眼のまえにあるのは状態である。」と共時言語学における「継起」の非在を明言している。一方で身体性に関わって「聴覚的能記は時間の線しか扱わない：それらの要素は順次に現われ、連鎖をつくる。」とも述べている。

二

「時間性」を重視する M・ハイデッガーはカントのような「継起」という把握をしない (SZ350 原・渡辺訳 548)。カントのように時間としての過去・現在・未来について論じなければかりではなく、過去・現在・未来という分類自体を採用しない。「始めもなければ終りもない純然たる今の連続」(SZ329 原・渡辺訳 519) としての「通俗的」時間は「根源的な時間性の脱自的な性格が水平化 (Nivellierung) されて

しまっている」(SZ329 原・渡辺訳 519) 点に特性があり、それは非本来的な時間性であるとする。ハイデッガーは「言の時間性 *die Zeitlichkeit der Rede*」の項で *Zukunft* (到来)・*Gewesenheit* (既在性)・*Gegenwart* (現在)の統一として時間性を考えている。

Zeitlichkeit ist das ursprüngliche >> *Außer-sich* << *an und für sich selbst*. Wir nennen daher die charakterisierten Phänomene *Zukunft*, *Gewesenheit*, *Gegenwart* die *Ekstasen der Zeitlichkeit*. Sie ist nicht vordem ein Seiendes, das erst aus sich heraustritt, sondern ihr Wesen ist *Zeitigung in der Einheit der Ekstasen*.

時間性は根源的な「おのれの外へと抜け出ている脱自」それ自体なのである。だからわれわれは、到来、既在性、現在という、すでに性格づけられた諸現象を、時間性の脱自態と名づける。時間性は、最初から一つの存在者であってその存在者がようやくおのれの内から外へと踏み出るといいうのではなく、時間性の本質は、諸脱自態の統一における時熟なのである。(M・ハイデッガー『存在と時間』SZ329 原・渡辺訳 519 傍線筆者)

ハイデッガーは
Die *Zeitigung* bedeutet kein >> *Nacheinander* << der *Ekstasen*.

時熟(時間化 熊野訳)とは、諸脱自態が「互いに継起すること(継起 熊野訳)」を意味するのではなく。

と述べて、時間性の脱自 *Außer-sich* 的性格を考慮しつつ

Zeitlichkeit zeitigt sich als gewesende-gegenwärtige Zukunft.

時間性は既在しつつあり現成化する到来として時熟するのである。(SZ350 原・渡辺訳 548 傍線筆者)

とする。
問題はそうした「時間継起」の核心を解明しようとしたハイデッガーの言 *Rede* についての規定の不徹底さにある。

Die volle, durch Verstehen, Befindlichkeit und Verfallen konstituierte Erschlossenheit des *Da* erhält durch die *Rede* die Artikulation. Daher zeitigt sich die *Rede* nicht primär in einer bestimmten *Ekstase*. Weil jedoch die *Rede* faktisch sich zunimmt in der *Sprache* ausspricht und zunächst in der Weise des besogend-betrenden Ansprechens der >> *Umwelt* << spricht, hat allerdings das *Gegenwärtigen* eine *bevorzugte* konstitutive Funktion.

現の完全な開示性は、了解、情状性、および頹落によって構成されているのだが、現のこのような完全な開示性は、言(語り)によって分節を受け取る。だから言は、第一的にはなんらかの特定の脱自態において時熟するのではない。けれども言は、現実的にはたいいてい言語のうちでおのれを言表し、差しあたっては、「環境世界」について配慮的に気遣い論じあいつつ語りかけるという仕方

で発言するゆえ、もちろん現成化することが一つの優先的な構成的機能はもっているわけである。(SZ349 原・渡辺訳 546 傍線筆者)

Die *Rede* ist *an ihr selbst* zeitlich, sofern alles *Reden über ... von ... und zu ... in der ekstatischen Einheit der Zeitlichkeit* gründet.

何かに関して語り、何かについて語り、何かに向かって語るすべての語りが、時間性の脱自的統一にもとづいているかぎり、語りはそれ自身に即して時間的なのである。(SZ349 原・渡辺訳 547 傍線筆者)

と「言(語り)」を脱自的統一に基礎づけられたあり方として規定する。しかし、これでは *an ihr selbst*、*gründet* の内実が不詳であり「言の時間性」の説明としては不十分であろう。言の線状性をハイデッガー的に「言の時間性」において再規定しない限り *Gegenwärtigen* (原・渡辺訳注 515) の説明はハイデッガーが従来の言語学において指弾したはずの「通俗的」時間と同様になることを免れえない。

Aus der *Zeitlichkeit der Rede*, das heißt des *Daseins überhaupt*, kann erst die >> *Entstehung* << der >> *Bedeutung* << *aufgeklärt und die Möglichkeit einer Begriffsbildung ontologisch verständlich gemacht werden*.

言の時間性「言いかえれば、現存在一般の時間性にもとづいてはじめて、「意義」の「成立」が解明されて、概念形成の可能性が存在論的に了解可能になること

ができるのである。(SZ349 原・渡辺訳 547 傍線筆者)
という説明による限り、了解と到来、情状性と既在性、頹落と現在という時間性の結合の内に言の位置はない。「言の時間性」の項であるにもかかわらず他の三脱自態と異なり言は従来分類されてきたいわゆる過去・現在・未来のどこにも位置づけられないのである。そうした事情によると考えられるが、E・シュタイガー『詩学の根本概念』⁽¹²⁾が認識した脱自態は確かに三項目である一方、時間性は言の時間性を含

めると四項目である。シュタイガーはカントと同様、認識の問題に関わる言をほとんど考慮していない。

ハイデッガーの述べる

Die Hinausgesprochenheit der Rede ist die Sprache.

言（語り）が外へと言表されたとき、それが言語となる。（SZ161 原・渡辺訳 289）

というのは言が諸脱自態の統一に基づきつつ時間性において、と「ごとく」ことであつた。同時的存在と言 *Rede* とがハイデッガーの形而上学的視野から意識的に排除されている歴史社会的心身の現在において交叉しつつ（眺望を時間的に展叙しつつ）言は言語芸術作品を志向する。言が関わりという意味で言語芸術作品はたとえ上述のカント的な時間の採用においてさえ時間性を無視し得ないのである。ましてシュタイガーの述べるような文芸、並びに文芸史の根柢がこうしたハイデッガーの「言の時間性」に基づいているとすれば諸脱自態と叙事的、抒情的、劇的の三様式を照応させただけで済ませるわけには行かない。ちなみにシュタイガーは了解（到来、いわゆる未来）と劇の様式、情状性（既在性、いわゆる過去）と抒情的様式、頹落（現在）と叙事的様式を対応させているが、九鬼周造「文学の形而上学」¹⁴は

時間の重心を過去、未来、現在に置く種々の時間論が可能であることを述べたのであるが、文学の時間的構造においても小説では過去に、戯曲では未来に、詩では現在に重きが置かれていると考えられるのである。

とし、同じくハイデッガーからの影響を受けつつも相容れない規定を行っている。シュタイガーの様式規定が直ちに承認されるわけではない。これは論証のために採用した作品の性格によるところも少なくないかもしれない。ただし、九鬼もまた文芸における言の意義を十分認識していないと考えられる。九鬼は「文学の形而上学」冒頭において文学を「言語によって表現された芸術」とする一方で「文学の本質は、言語による時間芸術ということによって大略が示される。」とも述べている。九鬼が「言語の形而上学を取扱おうとはしていない。」と述べようとも「言語によって表現された芸術」と「言語による時間芸術」という定義を比較する限り「によって表現された」と「による時間」とが同意味または並列でなければならぬはずである。九鬼は「文学の形而上学」において「言語」を音の連鎖、音素の単位では取り上げることが一連の語の連鎖として扱ってはいない。「表現される感情」、「現在の感動なり

直観」が言語によってどのように基礎づけられるのか、「時間」と「表現」との具体的な関係が明示されないまま、音楽の時間的単層性と異なり「文学は言語によって観念的時間を産むことにおいて時間の重層性を構成する」と述べられる。「一方に音の知覚と他方に言語による想像とが存在」するというのは言語の二重分節の問題として理解すべきであつたし、「厳密にいえば、言語の感覺性と観念性との二重性格に基いて、重層的時間が現象するのである。」と述べる場合にも時間を直接的に意味する語彙の指摘にとどまるべきではなかつた。「時間」と「表現」とが一对であるというハイデッガーの問題意識はここでは捨象されてしまつている。

具体的な作品には固有の時間性が要請される。時間性と歴史性との差異をいかに際立たせるかは形而上学をどのように（ハイデッガー的な意味で）破壊する¹⁵かによる。ハイデッガーは死との関わりにおいてのみ本来的な現存在を考えようとするが、少なくとも日常性が非日常によって断裂し画されることで生じる歴史性は固有の歴史社会的心身においてのみ具現されるはずである。「死へとかかわる本来的存在 *das eigentliche Sein zum Tode*」とは時間性に限定されながらもその中で充実する生の具象性を欠落させた、日常性の配慮の形而上学においてしか通用し得ない概念である。具象性を捨象し得ない歴史において差しあたつてシュタイガーが述べたように「基礎詩学はただ歴史的研究を用意するだけのものなのである」（前掲書 285）という認識をさらに深化させる必要がある。そこでは具体的限界を自覚する（短絡的に死というのではなく）文芸史の記述者の存在は文芸学にとって不可欠である。岡崎義恵が疑問を投げかけた文芸学と歴史学との共通基盤は以上に述べたような存在者（歴史社会的・偏在的な心身）の「言の時間性」の観点から定位されるべきであるし、岡崎の提唱する史的文学もまた言と時間性という観点から文芸史として再構築されなければならない。これについては後述する。

三

冒頭に引用した岡崎義恵の「直観」の定義を再度提示する。

直観（又は直覚）は、日本では特に勘といふやうな語で云ひあらはされることもあり、また感の語でも示される場合があるが、これは理論や実証を経た後、それが感覚や感情と結合して習性的な情態を呈し、もはや理論・実証の手順を歴ずして体験される真理の把握を意味することもあり、また理論や実証によつ

て確認される真理の予感・予測を意味することもある。とにかく理論や実証と密接な関連のある一種の知的作用ではあるが、それ自身は感覚や感情（特に情調）を非常に多く含み、一見、知的操作を必要としない利那的な心理作用によつて、一挙に端的な真理の把握をなし遂げるもののやうに見える。思ふに直観の中には、感情移入の如き対象感情や、聯想作用の微妙な交流による複雑にして迅速な印象的享受のやうなものも、少からず参加してゐるであらう。（『文藝学概論』4 傍線筆者）

確認しておくが「利那的な心理作用」は「一挙に端的な真理の把握」、「複雑にして迅速な印象的享受」であろうともそれは無時間ということではないし、微小だから無視してもかまわないということでもない。むしろこうした言及をしなければならぬほど捨象し難い重要な問題があると見なすべきであらう。R・インガルデンはこの点に関して次のように言及している。

Die besondere Ordnung der Aufeinanderfolge der Teile im literarischen Werke verwandelt sich in der Konkretisation in eine echte Aufeinanderfolge in der phänomenalen, konkreten Zeit. Das literarische Werk gelangt hier zu einer echten Entfaltung. Jede Konkretisation des literarischen Werkes ist ein zeitlich ausgedehntes Gebilde. Die Zeitspanne, die die jeweilige Konkretisation umfaßt, mag je nach Umständen größer oder kleiner sein, sie kann aber nie verschwinden.

文学的作品の部分の継起の特殊な秩序は具体化において現象的具体的時間のなかの真の継起に変化する。ここにおいて文学的作品は真の展開をみる。文学的作品のすべての具体化は時間的拡がりをもつ形像である。そのつどの具体化を包括している時間は状況により長くも短くもあらうが、しかし決して消滅する（176）ことにはできない。（294—295）

さらにそれらに関してI・カント『判断力批判』の言及する次のような機構の分析を照合させた。

Messung eines Raums (als Auffassung) ist zugleich Beschreibung desselben, mithin objective Bewegung in der Einbildung und einProgressus; die Zusammenfassung der Vielheit in die Einheit, nicht des Gedankens, sondern der Anschauung, mithin des Sukzessiv-Aufgefaßten in einen Augenblick, ist dagegen ein Regressus, der die Zeitbeugung im Progressus der Einbildungskraft wieder aufhebt und das

Zugleichsein anschaulich macht. Sie ist also (da die Zeitfolge eine Bedingung| des innern Sinnes und einer Anschauung ist) eine subjective Bewegung der Einbildungskraft, wodurch sie dem inner Sinne Gewalt antut, die desto merklicher sein muß, je größer das Quantum ist, welches die Einbildungskraft in eine Anschauung zusammenfaßt.

或る空間の測定（捕捉としての）は、同時にその空間を描くことであり、従つてまた構想力における客観的運動であつて、前進 Progressus を意味する。此に反して多くのものを直観における単一なもの（思考における単一なものではなくて）に総括すること、従つてまた継続的に捕捉されたものを瞬間的に総括することは背進 Regressus である。かかる背進は、構想力の前進における時間的条件を廃して同時的存在 Zugleichsein を直観的に表示することにほかならない。それだからかかる総括は、構想力 Einbildungskraft の主観的運動であり、（時間的継起 Zeitfolge は、内感および直観 Anschauung の条件であるから）構想力はこれによつて内感に強制 Gewalt を加えることになる。そしてこの強制は、構想力が一つの直観のなかへ総括するところの量が大であればあるほど、ますます顕著にならざるを得ない。（U157 篠田英雄訳『判断力批判』（上）169 傍線筆者）

直観としては「瞬間的に総括すること」、すなわち時間の意味については判断の保留である。しかし、時間が捨象されているわけではなく、言語認識の問題に関してF・ド・ソシユールが前述のように「聴覚的能記は時間の線しか扱わない。それらの要素は順次に（「一方向的に」町田訳）現われ、連鎖をつくる」と述べるのに従えば、線状的な言を想定するとして、それは過去と未来を同時に把持する現在に継起することはカント的な意味ではあり得ても、ソシユール的な意味では聞き手としての背進 Regressus は保証されてはいないと考えられる。むしろ言語認識として「過去形をもたない言語」はないというE・バンヴェニスト「言葉と人間の経験」⁽¹⁷⁸⁾の指摘に従いつつ、言の意味の把握は、「直観」の把握能力の限界を考慮し、物理的・時間的に連続する身体性がそこでは捨象できないという点で確保されていると考えらるべきなのかもしれない。

岡崎は

文芸作品は純粋に直観的に把握されるとき、その作品の形象を美的に観照し、美的体験として把握する結果になる。それだけでは科学的認識にはならないのである。科学としての文芸学は、そのやうな美的体験を、理論と実証とによって、何等かの意味で美学的体系の中へ位置づける役目を果さなければならぬ。文芸学の主な方法は、やはりこの理論と実証である。しかし文芸のやうな対象はそれだけでは捉へにくいので、直観力を誘導者として、そのやうな対象に理論と実証の作業を結びつけてゆくに過ぎないのである。文芸学の如きものは、恐らく科学中最も直観力を多く働かせてよいものに属するであらう。しかしそれには限度がある。直観が理論と実証との総和を超える程になると、もはや科学としての立場を失ふのではないかと思ふ。(『文藝学概論』12-13)

と直観による文芸学の限界を指摘しているが、岡崎の定義する「直観」は、先の引用からすればカントの「直観」の分析とはおよそ異なつた、修練を経た経験的認識、あるいは天稟のやうなものであり、長大な作品には適用することが難しい。それはA・ベークの言う「解釈学的循環 der hermeneutische Zirkel」の問題にも考察が及ばない、方法的に不備な直観の把握の域にとどまつている。ちなみに九鬼周造「文学の形而上学」はアウグスティヌスを援用して「芸術の時間的性格は現在の的であるということが出来る。但しその場合に現在というのとは点のような現在を言っているのではない。直観によって輪郭づけられた一定の持続を有つた現在である。」(傍線筆者)と述べ、幅を設けている。

カントと岡崎との共通点もある。既に自ら依拠している言語認識における言の度外視である。上述のようにハイデッガーの場合、それは少なくとも考慮されていた問題であつた。岡崎義恵の文芸学と言語学との関係について岡崎は

言語は文芸にとっては表現の媒材であり、文芸において言語を用ゐる目的は、それによって美的世界を創造せんとするところにあるから、言語の研究は補助的意義を持つに過ぎない。(『文藝学概論』24)

と述べており、言は単なる「媒材」に過ぎない。シュタイガーも含め、作品内解釈的方法であるにもかかわらず文芸における内在すべき言と時間性の意義は考察の外に置かれている。カントからハイデッガーへの論の深化はそこでは生かされていない。「言(語り)」と紛らわしいが後の技法的な「語り」論は上述の経緯を補足するために発生する。

四

形式論の隘路に陥つた技法の問題は措くとして「言葉は、存在の家 Haus des Seins である。」⁽²⁰⁾ というような神秘的、不明瞭な規定で済ませるのではなく(一方で言によって説明し尽くすことは不可能であるという立場もあろう)、カントの「継起」、またハイデッガーの「言の時間性」という時の言語自体の性質の規定がここでは問題となる。

プラーハ言語学サークルのセルゲイ・カルツェフスキーは「言語記号の非対称的・二重性」(原著1929年)において、ソシュールの説に反して、言語の記号は記号論的記号とは異なり記号と意味が完全には重なり合わない⁽²¹⁾と述べる。それゆえ「シニフィアンとシニフィエの二つは非対称的であり、組になつて、不安定な均衡の状態にある。言語体系が変化し得るのは、記号構造のこの非対称的・二重性のおかげである。」(傍線筆者)として自然言語の構造と可変性の統合に向けて先鞭をつけた。⁽²¹⁾

これは当然、言語の歴史性にも影響を与えるはずである。E・コセリウ「言語変化という問題」はその結論部において「時間のなかに継起するところの言語」を認め、言語の歴史的生成について「恒常的であると同時に継起的である」(傍線筆者)と述べる。一般に体系は一要素が変化するだけでも構造的に変化する。それを念頭に置き、解釈、陳述に言語をすでに使用していることを明瞭に自覚した上でハイデッガーが「Rede ist die Artikulation der Verständlichkeit. 言は了解可能性の分節化なのである。」(SZ161原・渡辺訳289)と規定する時、言の「不安定な均衡」上の「非対称的・二重性」における生成はその前提となる(意味の多義性だけでなく前述したカントのように「一義異語」もある)。

巨視的観点からすれば言語体系は安定した構造とは必ずしも言えないゆえに超時間的ではありえない。一方で微視的観点からすれば言の時間性と、音素と形態素との二分節による分節化してゆく拡がり⁽²²⁾が価値認識に連動する意味分節の非対称性とともにある。千野栄一はW・フォン・フンボルト同様、言語を人間の活動と捉え、伝達・呼応のための不変性の一方で「絶えず変化する言語外現実に対応していく可変性」(前掲書 傍線筆者)の要求に応えることで言語は変化するとカルツェフスキ

ーに即して説明する。そこには外的・物理的变化が前提されてもいる。「III Rede の時間性」の内実、共時態と通時態の交叉位置にあることの具体相はこれらの条件において定位されるべきであろう。

以上のように見てくると言によって構築された作品を考察する文芸学と文芸史がこれまで対立してきた原因が解消される。言と文芸を類比的にとらえることには当然、限界があるが、文芸を共時的に展望すれば文芸学、通時的に把握しようとする文芸史であるのは研究主体の観点の相違でしかなく、W・カイザーが前掲『言語芸術作品』序論で言及しているように両者は相即しているとも一応は言える。たとえ観点にしても共時態から通時的言語事象を排除することはできず、言の線状性⁽¹⁹⁸⁾の認識を欠いた体系的文芸学は虚妄に過ぎない。W・シェラーのようにその研究が詩学と（この時点ではたとえ作品、作者の解題的羅列に過ぎなかったとしても）文芸史にわたるのは決して不自然なことではないはずである。

非対称性による価値の生成の問題を含めて作品を対象とする文芸学は言を共通要素としつつも言語学的な文芸への接近と切点を有する。R・インガルデンは

Das allgemeine Wesen des Wertes habe ich tatsächlich nichtuntersucht. Dafür habe ich in jeder Schicht des literarischen Kunstwerks und auch in der Ordnung der Aufeinanderfolge der Teile des Werkes die Stellengesucht, wo Werte (genauer: künstlerische bzw. ästhetische Wertqualitäten) auftreten können. Ich habe auch auf mehrere solche Stellen hingewiesen.

価値の普遍的本質を筆者は実際考察しなかった。そのかわり筆者は価値（より厳密に言えば芸術的ないし美的価値品質）が現れる場合を文学的芸術作品のすべての層および作品の部分の継起の秩序 Ordnung der Aufeinanderfolge のうちに探究し、かつまたその場のいくつかを指摘したのである。(XXIV 『文学的芸術

作品』第三版序文12)

という方向で言から作品への拡張・転移をめざす。作品の「多声楽的調和 polyphone Harmonie」の価値論的妥当性の議論については措くとして、価値が作品内在的であることにR・ウェレック、O・ウォーレン『文学の理論』⁽¹⁹⁹⁾も異論はないが、文芸を対象とするまさにその時点で先験的に「文芸」の概念が判然としていると主張する

点でインガルデンとは異なる。文芸のあり方が先験的に規定し得ないのは文芸史の現実様態が変容として把握できるからであり、価値が作品内在的であると同時に流動する作品外現実と対応関係にもあるからである。

一般に作品は安定した構造体であるが、シニフィエの意味分節は光と闇、白と黒、内と外、上と下、右と左、大と小のように価値的に二項が非対称であるゆえに、任意の部分の焦点化や一要素の言語外変化でさえ意味分節の連鎖的変動と価値規範の断続平衡的な変容を引き起こす。三項対立については静止した状態（体系）では対称、均衡の状態であるが、それを部分的に焦点化し時間化すればやはり二項の動的非対称に至る。それゆえ三項対立は非対称な二項対立の下位分枝に還元しうるはずである。

虚構の生成はそうした言の可変性に基礎づけられていると考える。想像力という曖昧な概念を保留するならば、現実世界の切断、連結、補填、削除、拡張、伸縮、歪曲、反復、焦点化、多層化、その融合・越境等の方法は言の多義性、同義性（一義異語）と結合しやすく、言の非対称的二重性と言語外現実との不確定な対応可能性に虚構としての文芸は多くを負っている。多くをというのはすべてをということではなく、文芸が現実世界の変化に伴い文芸についての既成概念を解体・改変・再編し続けるゆえに確定できず、現実もまた文芸が生成させる言の剰余態、新たな命名・修辭による現実形成作用に影響されることもあるからである。

作品解釈の主体は固有性・屹立と一体の越境の自由に無自覚に自己を委ねることなく、緩やかな公共性の意味の場に配慮しつつ作品の周縁に研究主体を位置づけ関与し続けることが必要となる。シニフィアンとシニフィエの不安定な非対称的二重性の考察はあくまで作品との呼応関係に基づき歴史社会的存在者の倫理的要請のもとに文脈に即して個別的・具体的に行われるべきであろう。

文芸学が文芸史的考察を要請するのは以上のような文芸の機構における言の時間性と文芸の歴史美学的価値認識ゆえである。

結語

「直観」、「継起」への着目から未完ながら文芸とは何かという認識の入口に至りついで。岡崎義恵の文芸学が普遍性を追究することで拘泥した文芸学と歴史学との「同一地盤」の有無への問いも、岡崎自身の「直観」概念が覆い隠してきた時間の概念、「継起 Folge」から「言の時間性 die Zeitlichkeit der Rede」に至る研究史を俯瞰

することによって解明されるはずである。ただし、言の言語外現実への対応を忘失することはできない。中でも文芸とそれを創作、あるいは受容する具体的存在者との現実的關係は切り離しえない。文芸学は言と時間性、そして思考の場としての歴史社会的心身を学から排する誤謬、固有の存在者を等閑視する形而上学に再び陥ってはならない。

注

- (1) 岡崎義恵『文藝学概論』勁草書房 昭和26・4
- (2) 岡崎義恵「文芸学と文芸鑑賞」『日本文藝の様式』岩波書店 昭和14・9 初出昭和11・11
- (3) 大塚保治『美学概論』大塚博士講義集1『美学及芸術論』岩波書店 昭和8・5
- (4) 岡崎義恵『日本文藝学』岩波書店 昭和10・12
- (5) 芳賀矢一『日本文献学』芳賀矢一遺著『日本文献学 文法論 歴史物語』富山房 昭和3・10
- (6) Boeckh, August. *Encyklopädie und Methodologie der philologischen Wissenschaften* 安酸敏眞訳『解釈学と批判—古典文献学の精髓—』知泉書院 平成26・5 ただし原著の主要部の翻訳である。
- (7) 垣内松三編著『文学理論の研究』不老閣書房 昭和7・5
- (8) 国松孝二「文献学 A・ベーク」『国文学解釈と鑑賞』至文堂 昭和34・11
- (9) Kant, Immanuel. *Kritik der reinen Vernunft*. Reclam. I・カント 篠田英雄訳『純粹理性批判』岩波文庫(上) 昭和36・8
- (10) Saussure, Ferdinand de. *Cours de linguistique generale* Paris: Payot. 1972 初版1916年 F・ド・ソシュール 小林英夫訳『一般言語学講義』岩波書店 昭和47・12 傍線筆者 なお、アンドレ・マルティネ 三宅徳嘉訳『一般言語学要理』岩波書店 昭和47・9 初版1970年に「声による言表は必ず時間的な展開し、聴覚によって必ず一つの継起として知覚される。」とある。傍線筆者
- (11) Heidegger, Martin. *Sein und Zeit*. Tübingen: Max Niemeyer. 1993 初版1927年 M・ハイデッガー(ハイデガー)『存在と時間』原佑・渡辺二郎訳 中

央公論社 昭55・2 以下、『存在と時間』の引用は同書に拠る。なお、S2と略記する。

- (12) 「言 Rede」(あるいは「話」細谷訳 E・コセリウ後述書索引参照)の訳文は「語り」。第三十四節の表題は「Da-sein und Rede. Die Sprache」とあり、原・渡辺訳注では訳語「語り」は意を尽くしていないとする。熊野純彦訳は仏訳がソシュール『一般言語学講義』初版1916年の parole と langue とを念頭に置くという指摘を紹介し、また、E・コセリウと同様ヘーゲルの『エンチクロペディ』の用例をも提示している。E・コセリウの指摘として Rede と Sprache との関係はソシュールよりも前にゲオルク・フォン・デア・ガールベレンツ 川島淳夫訳『言語学』同学社 平成21・10 初版1891年 が「ある言語の生命の発露は、より正しく言えば、生命の発露にほかならない言語 (die Sprache) そのものは、人間の魂から直接にほとぼり出る話し言葉 (die Rede) である。」と述べているのである。ソシュールとガールベレンツの学説の関係についてはE・コセリウ 下宮忠雄訳『一般言語学入門』第2版 三修社 平成15・10 同訳功訳「ゲオルク・フォン・デア・ガールベレンツと共時言語学」『コセリウ言語学選集(第4巻) ことばと人間』三修社 昭和58・8 の指摘による。本稿では Rede の訳語を下宮忠雄訳によって「言」としている。ハイデッガーも右のような言語学の影響下にあることが考えられる。
- (13) Staiger, Emil. *Grundbegriffe der Poetik*. Zürich: Atlantis. 1946 E・シムタイガー 高橋英夫訳『詩学の根本概念』法政大学出版社 昭44・4
- (14) 九鬼周造「文学の形而上学」小浜善信編『時間論 他二篇』岩波文庫 平成28・2所収 原著1941年
- (15) M・ハイデッガーは(11)において Destruction der Geschichte der Ontologie (存在論の歴史の破壊) は positiven Tendenz (積極的傾向) を有するとする。Destruction と J・デリダの déconstruction との関係は Derrida, Jacques. *De l'esprit* Paris: Galilée. 1987 J・デリダ 港道隆訳『精神について』人文書院 昭和60・7 において La tâche d'une déconstruction (Destruction) de l'histoire de l'ontologie (存在論の歴史の破壊) 脱構築という任務) とされている。渡辺仁史「文芸史記述の方法」『文芸研究』第1

38集 平成7・1 参照

(19) Ingarden, Roman. *Das literarische Kunstwerk*. Tübingen: Max Niemeyer, 1972. 初版1931年 366 R・インガルデン 瀧内楨雄・細井雄介訳『文学的芸術作品』勁草書房 昭和57・12

(17) Kant, Immanuel. *Kritik der Urteilskraft*. Reclam. I・カント 篠田英雄訳『判断力批判』(上) 岩波文庫 昭和39・1

(18) エミール・バンヴェニスト 阿部宏監訳 前島和也、川島浩一郎訳『言葉と主体―一般言語学の諸問題―』岩波書店 平成25・10 原著初版1974年

(19) ヴォルフガング・カイザー 丘澤静也訳「物語るの誰か?」『現代思想』1978・3 青土社 原著1957年 カイザーはこの論文でF・シュタンツェル、K・ハンブルガー等の直近の「語り手」論に言及しているが、カイザー自身は主著 (Kaiser, Wolfgang. *Das sprachliche Kunstwerk*. Tübingen und Basel: Francke 1992 参照)『言語芸術作品』第六版1960年 では「語り手」の項目を立てていない。カイザーの突然の死去によるのである。(20) ハイデッガー 渡邊二郎訳『ヒューマニズム』について『ちくま学芸文庫 平成9・6

(21) 以上、千野栄一『言語学 私のラブストーリー』三省堂 平成14・7 による。なお、ヤン・ムカジョフスキー 平井正・千野栄一訳「詩的な意味表現と言語の美的機能」原注(1)『チェコ構造美学論集』せりか書房 昭和50・7 三谷恵子「カルツェフスキー」『言語』2001・2別冊 言語の20世紀101人 大修館書店 平成13・2 も参照。ロシア語文法を研究したカルツェフスキーの着想にはシニフィアンとシニフィエとの関係が複雑なスラヴ系の諸言語間の関係への注視があつたのかもしれない。三谷恵子『スラヴ語入門』三省堂 平成23・8 「はじめに」の項にスラヴ語の実態について言及がある。

(22) E・コセリウ 田中克彦訳『言語変化という問題』岩波文庫 平成26・11

(23) プラーハ言語学サークル(マテジウス、ハヴラーネク、ヤコブソン、ムカジョフスキー)「第一回スラヴィスト会議提出のテーゼ」水野忠夫訳『ロシア・フォルマリズム文学論集2』せりか書房 昭和57・11

(24) (16) XXIV 第三版序文12

(25) Wellek, René. and Warren, Austin. *Theory of Literature*: Harcourt Brace and Co. Inc. 1948 R・ウェレック、O・ウォーレン 太田三郎訳『文学の理論』筑摩書房 昭和42・5

日本語訳については以下の翻訳書も参照した。

カント全集8・9 牧野英二訳『判断力批判』上・下 岩波書店 平成11・12、12・9

『新訳 ソシュール一般言語学講義』町田健訳 研究社 平成28・9
ハイデガー 熊野純彦訳『存在と時間』(一)~(四)岩波文庫 平成25・

4~25・12
マルティン・ハイデッガー 細谷貞雄訳『存在と時間』上・下 ちくま学芸文庫 平成6・6

本稿欄筆後、中村三春「文芸学と概念的相対主義―高橋義孝『文芸学批判』の再検証―」『日本文化研究所研究報告』第28集 平成4・3 に接した。(対応「伝達」概念の設定について共感するところがあつたことを記しておく。

(二〇二二年九月二十八日受理)